

郵便
報知新聞
第四百二十六号

日光山の天杓の使と号る似而非の漢
己が名に似る爲被ふ断髪頭巧もの
浅き深川の其名も高き鼻柱西村の
宅お至り何れ踳躐へ白銀の大國の像
と三四つと出—其許信心の深きと
予が師公の感とあひ福寿田満無量と
授んと態々特使と立られすと物有
貌ふ論せども團套、契りぬ大膳老物
俺は商人中の大天杓の似き本
葉天杓の部曲の裏面も見える奴
あり脚底の明白際退去むる眼
物見せんと眼鏡の上端より赫と瞋
—眼の光りみ懼怕て影を匿せ
とを此ハ明治七年秋の事
龜洲漁人誌

